

Title	『定家卿百番自歌合』三次本への改訂 : 四季と恋
Author(s)	細川,知佐子
Citation	詞林. 2006, 40, p. 29-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67556
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『定家卿百番自歌合』三次本への改訂

――四季と恋――

じめに

『定家卿百番自歌合』は、定家自撰の百番からなる自歌合『定家卿百番自歌合』は、定家自撰の百番からなる自歌合と三次本のみである。

「四季」「恋」「雑」の部立を持ち、その内部には綿密なで、「四季」「恋」「雑」の部立を持ち、その内部には綿密なが知られる。しかしこの序を持つ伝本には、定家晩年の貞永が知られる。しかしこの序を持つ伝本には、定家晩年の貞永が知られる。しかしこの序を持つ伝本には、定家晩年の貞永が知られる。しかしこの序を持つ伝本には、定家晩年の貞永が知られる。しかしこの序を持ち、その内部には綿密なで、「四季」「恋」の部語と、本自歌合序の記述により、建保四件「治遺影草」の部語と、本自歌合序の記述により、建保四件が知られる。

の変化の有無という観点で行われてきた。草野隆氏は、一連歌を作品から抜き出し比較検討することによる、定家の好尚芳麻呂氏以来、改訂で差し替えられた切り出し歌と切り入れ三次本への改訂(以下三次改訂と呼ぶ)の先行研究は、樋口

細川知佐子

と「恋」四首の考察を行う。 首、「恋」四首、「雑」四首であるが、本稿では「四季」二首 えが行われている。差し替え十首の内訳は「四季(秋)」二 うな変化を遂げたか考察し、三次改訂がいかなるものであっ は、番内部での左右の歌の入れ替え一箇所と、十首の差し替 たか、その一端を明らかにしたい。なお、三次本への改訂で の比較から、綿密な配慮をした本自歌合が改訂によりどのよ でなされてこなかった二次本と三次本の改訂箇所の結番構成 単なる自賛歌の集成、秀歌撰ではないことを示すであろう。 ていない。そもそも部立を持つ自歌合という形態そのものが、 ことが必要」とされるが、指摘にとどまり具体的に述べられ 比較するのではなく、その結果として、既に構築されていた し、三次本への改訂についても、「単に切り入れられた歌を 緻密な文芸的配慮」に留意した考察が必要であることを指摘 の論攷で、本自歌合は「単なる自賛歌を集成したものでなく 「結番」にどのような変化がもたらされているのかを考える そこで本稿では、定家晩年の三次改訂を取り上げ、これま

、「春」一二番と「秋」三六番の改訂

四季部は、本自歌合の半数五十番百首で、「春」「夏」「秋」

「冬」に分けられ、「春」一二番に番内部左右の歌の入れ替え

改訂箇所の中、二九番は次の三十番を含めた歌順の入れ替え なわれている。「夏」と「冬」では改訂がなされていない。 があり、「秋」では二九番、三六番の二箇所で差し替えが行

では「春」一二番と「秋」三六番の改訂を考察する。 を伴う差し替えで複雑となるため、順番が前後するが、 ではまず、番内部で左右の歌の入れ替えがなされている三 本節

に付した。以下同じ。)。 次本の「春」一二番を前後の番と共に次に掲げる(傍線は私

右 左 長花の色のをられぬ水にさすさをの雫もにほふ宇治の河 槇の戸は軒ばの花のかげなれば床も枕も春の曙

らかである。

包 (左)名もしるし峰の嵐も雪とふる山桜戸のあけぼのの空 名取河春の日数は顕れて花にぞしづむせぜの埋木

右 左

今日こずは庭にや春ののこらまし梢うつろふ花の下風 花の香も風こそ四方にさそふらめ心もしらぬ故郷の春

左

右

番右「宇治川の桜」と一二番左「名取川の落花」が並び、 らない」と指摘される。左右の歌を入れ替えることで、一一 歌を置いた方が、嵐山の歌を置くより自然であるからに外な 十一番右の宇治の河長の歌に対しては、十二番左に名取川の 分についてのみ、「十二番の歌の左右の順序を逆にしたのは、 落花を主題にした一番である。樋口芳麻呂氏は改訂のこの部 にあり、前後の番も桜の歌の結番だが、一二番は山と川での となる(括弧内は二次本の配列)。この入れ替えは桜の歌群:

二番右「嵐に散る桜」と一三番左の「風」が誘う「花の香」 により、定家が前後の番との繋がりを重視していたことは明 りはなく、当然構成に変化はみられない。但しこの入れ替え との繋がりがより自然になった差し替えで歌そのものに変わ (落花)が並ぶ。樋口氏の指摘にあるように、前後の番の歌

切り出し歌。以下同じ。)。二次本の三六番は、 次に「秋」三六番の差し替えをみていく (□で囲った歌は

であるが、三次本では、左が「関白左大臣家百首」「秋」 久方の月の桂の下紅葉やどかる袖ぞ色にいでゆ

0

小倉山時雨るる比の朝な朝な昨日は薄き四方の紅葉ば

紅葉」題で詠まれた、

(新勅撰・春下・九四)

となっている。差し替えられた二首を比較すると、いずれも 時雨つつ袖だにほさぬ秋の日にさこそ三室の山 (新勅撰・秋下・三四六)

「時雨」によって色付く「山」の紅葉を詠んでいる。この一

三五番右の、

と、三七番左、夕づく日むかひの岡の薄紅葉まだきさびしき秋の色かな

にあり、「秋」唯一の「紅葉」の歌の結番である。の「紅葉」を詠んだ前後の歌二首に挟まれた「紅葉」の歌群要ありてうつろはむとや白菊の紅葉の下の花にさきけん

切り出された「小倉山」の歌は、夏十八番右にも採られた、「君」「一人」(「八倉山」の歌の糸者である。

前歌の「薄紅葉」を承ける「昨日は薄き」と「時雨」によっえられている。『拾遺愚草』によると歌題は「秋朝」だが、の一首である。つまり、二次本への改訂ですでに一度差し替詠歌年次から二次本切り入れ歌であることがわかる六首の中建保五(一二一七)年四月十四日の「院庚申五首」の歌で、建保五(一二一七)年四月十四日の「院庚申五首」の歌で、

て、毎朝次第に色を濃くしていく「紅葉」という趣向が生じ

えは、新たに「紅葉」題で「時雨」を詠み込んだ秀歌「夕づり入れられた歌は、『新勅撰集』入集歌である。この差し替方」との詞の対比などであろうか。一方、三次本で新たに切すしていくという朝と夜の対比、あるいは「四方」と「久葉」、右に「月の桂」の「紅葉」が宿とする「袖」が色を濃葉、右に「月の桂」の「紅葉」が宿とする「袖」が色を濃なため、ここに置かれたと思われる。二次本における三六番

られるが、改訂により名所が山城国「小倉山」から大和国く日」の歌を、それに相応しい場所に切り入れたものと考え

番という構成に変化はない。

「さこそ」「染むらめ」と想像する形に変化している。これに 「三室山」に変わった。二次本では、前番右に詠まれ じより緊密な一番となった。 番内部では左右に「袖」が詠まれることで、歌語の連関が生 が重層的になり、構成に広がりができたといえよう。 より眼前の「紅葉」と、心に思い描く「三室山」の「紅葉」 名所である大和の「三室山」の「紅葉」を、「時雨」 定家の山荘のある「小倉山」が詠まれているため、 かひの岡」から「小倉山」の「紅葉」へ転じる構成であった。 三次本では、眼前の「むかひの岡」の「紅葉」から、紅葉の 「むかひの岡」も山荘から見える辺りが連想される。 また、 により それが 前歌の た

成となった。しかし、「春」の「桜」三番と同様「紅葉」のの歌群も色がより鮮明となった上に、空間的広がりを持つ構ろう。ここでの差し替えは、番内部が緊密となり、「紅葉」とだが、切り入れ歌の「さこそ」「染むらめ」は、眼前のことだが、切り入れ歌の「さこそ」「染むらめ」は、眼前のことだが、切り入れ歌の「さこそ」「染むらめ」は、眼前の、最後の三七番左では「白菊」と取り合わされ、「色」がり、最後の三七番左では「白菊」と取り合わされ、「色」が

「紅葉」の歌群四首は、最初の三五番右が「薄紅葉」とあ

二、「秋」二九番の改訂

次に、「秋」二九番の差し替えをみていく。二次本「秋」

二九番右「花月百首」の「月」五十首から『新古今集』に入

さむしろやまつよの秋の風ふけて月を片しく宇治の橋姫 |秋上・四二〇|

が切り出されている。替わりに切り入れられたのは貞永元年 「関白左大臣家百首」 「月」題で詠まれた、

だが、これは二九番右にそのまま差し替えられたのではなく、 三十番右に置かれ、二九番、三十番の他の歌も後掲するよう に歌順が入れ替えられている。二五番から三十番は月の歌群 下荻もおきふし待ちの月の色に身を吹きしをる床の秋風

順の入れ替えがあるものの、やはり「桜」や「紅葉」の改訂 二首の比較を行うと、どちらも「月」を主題としており、歌 えがなされ、より大きな改訂となっている。差し替えられた となっているので、月の歌群中での改訂となり、前節の に、二九番、三十番という隣り合う二番四首の歌順の入れ替 「桜」や「紅葉」と同様だが、ここでは一首の差し替えと共

を前後の番と共に次に掲げる。(便宜上歌順に番号を付し、差

列が変化しているので、二次本・三次本それぞれの当該箇所

し替え歌はゴチックにした。)二次本では、

1 左 かは 明けば又秋の半も過ぎぬべしかたぶく月のをしきのみ 新勅撰・秋上・二六一)

幾里か露けきのべにやどかりし光ともなふ望月の駒

二九番

2 右

3 左 **4** 右 さむしろやまつよの秋の風ふけて月を片しく宇治の橋 高砂の尾上の鹿の声たてし風よりかはる月の影か

姫

5 左 露さえてねぬよの月やつもるらんあらぬ浅茅のけさの 三十番

色かな

6右 独りぬる山鳥の尾のしだりをに霜置きまよふ床の月影 (新古今・秋下・四八七)

7 左 らむ 白妙の衣しでうつひびきより置きまよふ霜の色にいづ

秋とだに忘れむとおもふ月影をさもあやにくにうつ衣 、新古今・秋下・四八○)

三次本では、

的情調を有する点でも共通し、差し替えの歌二首に大きな違 響かせる「秋風」や「待つ」を詠み、叙景歌でありながら恋

はみられない。しかし、歌順の入れ替えにより、結番や配

と同じく、歌群という大枠の構成に変化はない。「飽き」を

8右

1 左 かは 明けば又秋の半も過ぎぬべしかたぶく月のをしきのみ

2 右 幾里か露けきのべにやどかりし光ともなふ望月の駒

二九番

高砂の尾上の鹿の声たてし風よりかはる月の影かな 露さえてねぬよの月やつもるらんあらぬ浅茅のけさの

色かな

下荻もおきふし待ちの月の色に身を吹きしをる床の秋 独りぬる山鳥の尾のしだりをに霜置きまよふ床の月影

7 左 白妙の衣しでうつひびきより置きまよふ霜の色にいづ

秋とだに忘れむとおもふ月影をさもあやにくにうつ衣

となる。二次本・三次本で変化のない箇所から結番と配列を かな

の「望月」との掛詞となっており、この一番は秋の半ばであ に「望月の駒」を置く。「望月」は信濃の地名だが、十五夜 みていくと、二八番は左に「明けば」「秋の半も過ぎぬ」、右 る八月十五夜の歌の結番で、二五番から三十番までの「月」

の駒」から連想される形で、二九番左に地名プラス動物の

であることはそのままである。三十番は、左に「独りぬる山 共通点の見出せない結番である。但し、恋的情趣を持つ結番

の歌群の中心に位置するものである。その後二八番右「望月

ら「宇治」に場面が転じ、「風」を共通の語としながら二九 「高砂の尾上の鹿」が続くが、この後二次本では、「高砂」か

番は名所詠の一番となっている。二次本成立時である建保期 の流行である名所詠を意識した結番とみることもできよう。

また、左「鹿の声」は妻問いのもの、右は恋人を待つ「宇治 の橋姫」と、四季歌でありながら恋的情趣を持つ二首の結番

関を持つ歌が左に置かれ、右には「独りぬる山鳥」の歌が合 から「露さえて」、「待つ夜」から「寝ぬ夜」という歌語の連 でもある。次の三十番左では、「さむしろや」の「風ふけて」

き、「擣衣」の一番となる。 よふ」から、語順を換えた「置きまよふ霜」を詠んだ歌に続 しての「月」の歌は終わる。三一番左は、前歌の「霜置きま がら、恋的情趣を持つ「月」歌の結番である。ここで歌群と わされる。前番に続き、動物を詠み込んだ歌を一方に配しな

無くなった。また、二九番右に二次本三十番左の「露さえ されたことにより「高砂」と「宇治」という名所詠の結番が みていく。まず、二次本二九番右の「宇治の橋姫」が切り出 な」と句末が揃ったようだが、「月」の歌という以外あまり も無くなった。替わりに左「月の影かな」右「今朝の色か て」が置かれたため、二次本で共通した歌語「秋風」の連関 では改訂によりどのような変化があったか、次に三次本を

鳥」の歌、右に切り入れ歌「下荻も」が置かれた。これ ŧ

差し替えにより、左右の結句が「床の月影」「床の秋風」と

である。二次本にあった「霜置きまよふ」から「置きまよふ 揃い、「床」という詞から、やはり共に恋的情趣を持つ一番

まよふ」に緩やかに繋がっているといえよう。三次本で新た に見出せる趣向は、まず妻問いに鳴く「鹿」と独り寝の「山

の「おきふしまち」が、似通った音を持つので、次の「おき 霜」への歌語の連関はなくなったが、「おきまよふ」と右歌

鳥」をそれぞれの番の左に置き、右に恋的情趣を持つ歌を合

によって何らかのイメージを連想させる女性像が無くなったわせたことである。二次本の「橋姫」のように、伝承や物語

ことにより、左に詠まれた「鹿」や「山鳥」を擬人化して詠

の「鹿」や「山鳥」の姿が残像として残り、番内部の和歌世 んだ歌として右歌を味わうことができる。つまり右歌にも左 る。そのため、歌順の入れ替えが行われたと推測される。 界に奥行きを持たせながら、一つのまとまりとする働きをす 加

らではともいえる名所詠の結番という趣向が無くなったこと えて、それぞれの結句の表現が似通ったものとなり、二次本 意味上も表現上も同種の二番が続くことになった。建保期な に較べ、番内部の結合が強くなった。これにより歌合として、

での恋の風情ということで、定家は人ではなく、あえて もあり、構成がすっきり整ったといえるだろう。四季歌の中 |] や「山鳥」によって恋の情趣を込めた月の歌を歌群後

> 半に配列したと思われるが、二次本では、二九番を部立 「秋」とは直接結びつかない名所、「高砂」と「宇治」の名所

詠の結番にしていた。 三次本の結番や構成全体をみた後で、二次本をみると「さ

なくとも自歌合の構成の中では、突出し過ぎる歌といえよう。という表現と合わせ新古今時代の代表歌である所以だが、少 むしろや」の歌の「宇治の橋姫」の存在感は大きく印象も強 い。もとよりそれは、この歌の持つ魅力であり、「風ふけて_

ではなく、秋の月の歌群の結番や構成配列への好尚の変化と いうこともできるのではないだろうか。また三次本では、月 定家の好尚の変化をいうのであれば、一首の歌そのものだけ

ことにより、二八番の八月十五夜と照応させ、月歌群の最後 であることを明確にしたといえる。

にするため、次に歌群全体の構成を考えたい。「月」歌群の 三次改訂による「月」の歌群内部の構成の変化をより明らか ここまで改訂箇所のある「月」の歌群後半をみてきたが、

前半三番を掲げる。

左

のべとやしらぬ昔の秋をへて同じ形見に残る月影 - 一〇八〇

秋をへて昔は遠き大空に我が身ひとつのもとの月影 新勅撰・雑

右

の歌群の最後を十九夜である「臥し待ちの月」で終わらせる

左 天の原思へばかはる色もなし秋こそ月の光なりけれ

右 かにせむさらでうき世はなぐさまず頼みし月も涙落 (同右・秋上・二五六)

二七番

ちけり (千載・雑上・一〇〇四)

ながめつつ思ひしことの数数にむなしき空の秋の夜の

左

昔だに猶故郷の秋の月知らず光の幾めぐりとも

集している歌で、特に二五番左「しのべとや」は定家自身が 番左は『新勅撰集』、二六番右は『千載集』で「雑部」 歌群前半は叙景歌でありながら述懐性の強い歌が並ぶ。 の歌群後半が、恋的情趣を持つ歌であったのに対し、 盂 に入

り「月」の歌群全体をみると、二八番の左「明けばまた秋の が殊更に強調される述懐の色彩が強い配列構成である。 にも「昔」や「うき世」「故郷」が詠まれ、「秋」であること 定家自身も深い絶望を味わった時期の歌である。これら以外 主家九条家が失脚したいわゆる「建久の政変」の翌年であり、 つ」には「述懐秋歌建久八年」の注記が付くが、建久八年は 雑部に撰入していることになる。また二七番左「ながめつ つま

半も過ぎぬ」と右「望月の駒」という八月十五夜の一番を境

(秋の歌ではあるものの)前半は述懐に寄せ、後半は恋に寄

配

せる月の歌といった対比による構成がなされていることがわ

また二五番は「残る月影」「もとの月影」、二六番は

歌群の最初に置かれた二五番「残る月影」「もとの月影」と れる。月の歌群後半の差し替えにより結句を揃えたことで、 光なりけれ」「涙落ちけり」と句末が似ていることも注目さ

でに構築されていた構成配列の趣向を、より完成されたもの な趣向が生じたことを述べたが、正確にいえば、二次本です 全体のまとまりも生まれたのである。差し替えにより、新た 最後の三十番「床の月影」「床の秋風」が対称となり、

にし、歌群の前半と後半に統一感をもたせたといえる。 切り出し歌「さむしろや」は、『新古今集』入集歌である

ることから、従来切り出しが問題とされてきた。切り出しの で達磨宗と称されたように、いかにも新古今らしい和歌であ ことや、「風ふけて」という表現が『無名抄』「近代歌躰事」

「月」の歌群全体の中で、二次本と三次本を比較すると、差 かであろう。切り出しは本自歌合の中での構成配列上、 し替えによって結番や歌群構成の完成度が増しているのは確 の点を全く否定することはできない。しかしこのように 理由は、定家が新古今的表現を忌避したためかもしれず、

の歌材の順序を変えるなど、全体の構成配列を大きく変える のものに注目するだけではなく、秋の月の歌群の結番や構成 以上、 |列への好尚の変化ということもできるのではないだろうか。 一と二で四季歌の改訂をみてきたが、 四季歌の中で

とができ、定家の好尚の変化をいうのであれば、

一首の歌そ

にその場所に相応しい歌を得たことによりなされたというこ

めであったといえよう。 次本である程度構築されていた構成配列の完成度を高めるた 部の変化に過ぎなかった。また歌群内部の変化も、すでに二 ものではなく、いずれも「桜」「紅葉」「月」といった歌群内 おける名所詠の重要性を窺わせる。前述したように当時の歌

三、「恋」五八番の改訂

は左右二首共差し替えられているので、合わせて四首の差し 五八番、六一番、七六番の三箇所で改訂が行われ、五八番で 恋部は、五一番から八十番の三十番六十首で構成される。

の歌ということである。この百首は建保期の名所詠流行を反 きたい。それは切り出し歌が全て建保三年「内大臣家百首」 はじめに恋部の改訂で重要と考えられることを指摘してお

替えとなる。しかし、いずれも歌順の入れ替えはない。

映して、恋二五首全てが「寄名所恋」題で詠まれており、本 番歌合」からは、本自歌合に二二首採られているが、「四季」 自歌合二次本には二五首中一六首が採られている。「千五百

一二首「恋」七首「雑」三首を合わせての数値(二次本、三

首と七五番から七七番の三番六首という具合に、歌群として その上これらの歌のほとんどは、五六番から五九番の四番八 次本共通)で、同一部立では最も多く採歌された催しである。 配列されている。また「内大臣家百首」以外の名所詠九首を

合わせると、二次本の恋部三十番六十首中、二五首が名所詠

で、これは恋部全体の四割以上を占めることになり、恋部に

切り入れ歌は、全て「関白左大臣家百首」の非名所詠である。 壇の流行を背景とした採歌であろうが、その中でも歌数の多 三次改訂における恋部の差し替えは、二次本で主調となった 恋」の歌を主調に配列構成されたことが推測されよう。一方 さと二つの歌群により、二次本が「内大臣家百首」「寄名所

次に恋部全体の構成を確認する。最初の一番である五 新たな名所詠は加えなかったことになる。 番

「内大臣家百首」の名所詠一六首から、四首を減じ一二首に

は、左に「六百番歌合」から『新古今集』に入集した、 なびかじな海人の藻塩火たきそめて煙は空にくゆりわぶ |恋二・一〇八二

右に、「院句題五十首」の恋一首目「寄雲恋」で詠まれた、 しられじな千しほの木の葉こがるとも時雨るる雲に色し みえねば

はまだ相手に知られぬ恋の思いを詠んでいる。 を番えており、左は「初恋」題で詠まれた恋の初めの歌、右 恋部最後の八

十番は、

左

やすらひにいでけるかたもしらとりのとば山松のねにの 須磨の海人の袖に吹き越す潮風のなるとはすれど手にも 同・同・一一一七)

右

という名所詠二首の番で、 みぞなく 海と山それぞれで恋の終わりを嘆

歌は全て「関白左大臣家百首」の歌だが、恋の進行に応じたう一般的な恋の部立構成と考えてよいと思われる。切り入れく一番となっている。従って、恋の初めから終わりまでとい

られる。ので、恋の進行に従うという大枠の構成に変化はないと考えので、恋の進行に従うという大枠の構成に変化はないと考えれぞれ一首ずつ、しかもその順序通りに差し替えられている以下の歌題「忍恋」「不逢恋」「後朝恋」「遇不逢恋」からそ

「内大臣家百首」から採歌された名所詠の歌群が完全に分断五九番の中の一番だが、左右二首共差し替えられており、たい。五八番は「内大臣家百首」の歌群の一つ、五六番から

以上を踏まえ五八番から順に差し替えを具体的にみていき

されることになる。次に二次本五八番を示す。

たんと、まざ目手になり思いたなようれないないないないないないないないないないで、いれている。「甲斐が嶺」と「竜田山」という山の名所によこの二首は「内大臣家百首」でも四首目、五首目と並んで置「竜田山ゆふつけ鳥のおりはえて我が衣手に時雨ふるころ」左「甲斐が嶺に木葉吹きしく秋風も心の色をえやはつたふる」左

左 うへ繁る垣根隠れの小篠原知られぬ恋はうきふしもなしは次の、雨」という季節を詠み込んだ一番でもある。これが三次本で雨」という季節を詠み込んだ一番でもある。これが三次本であだいの番だが、名所詠の番であるとともに、「秋風」「時そえて、まだ相手に恋の思いを伝えられない歌と恋の涙を詠

と差し替えられた。左は「忍恋」、右は「不逢恋」題で詠ま

夜な夜なの月も涙に曇りにき影だにみせぬ人を恋ふとて

にもがもやことづてやらむ」(東歌・一〇九八)の本歌取であに」の歌は『古今集』「甲斐が嶺をねこし山こし吹く風を人名所だけでなく季節も詠まれていない。二次本「甲斐が嶺歌われる恋の状況にほとんど変化はない。但し三次本の歌は涙にくもりにき」という具合に、表現は変わっているものの、涙のは同じく「我が衣手に時雨」という「涙」の比喩が「月はある。左は二次本の「えやはつたふる」が「知られぬ恋」、れた歌で、相手にまだ知られていない恋と、恋の涙の一番でれた歌で、相手にまだ知られていない恋と、恋の涙の一番で

出したものであることを、拙稿で指摘した歌である。の「秋風」に工夫をみせ、当時流行した名所と取り合わせ詠

る。恋歌における「秋風」と名所との組み合わせが八代集に

一首しかなく、珍しいことから、建保期の定家が常套的な恋

七番の左は「くるる夜は衛士のたく火をそれと見よ室の八嶋の名所から山の名所へという趣向も考えられよう)。しかし、五いう季節の流れが複合的に組み込まれていたことになる(海本では「内大臣家百首」の名所歌群という上に、夏から秋ともひも恋も夜はもえつつ」と夏の景物「蛍」が詠まれ、二次前歌である五七番右は「蘆の屋に蛍やまがふ海人やたくお前歌である五七番右は「蘆の屋に蛍やまがふ海人やたくお

である。なお、切り出された名所については後述する。分断されたことが、改訂による構成上最も大きい変化のよう番である。つまり、五六番から五九番までの名所詠の歌群がされず、恋の思いを名所の景物によそえて「火」に譬えた一

も都ならねば」と、季節を示す歌語はなく、特に季節は意識

四、「恋」六一番と七六番の改訂

左

右

勅撰集』入集歌同士の結番、を考えるため、ここでは六十番からみていく。六十番は『新を考えるため、ここでは六十番からみていく。六十番は『新た構成配列になっていることを述べたが、六一番の差し替え、一番左である。 恋部は恋の進行に合わせ

よさに (恋二・七四四)左 恋ひ死なぬ身のおこたりぞ年へぬるあらば逢ふよの心づ

ん 逢ふことは忍ぶの衣あはれなどまれなる色に乱れそめけ

本自歌合とは異なる配列である。さてこの六十番は左が「久撰集』での収載巻はそれぞれ恋二と恋五となっているので、となっている。左右とも二次本での切り入れ歌だが、『新勅

恋死にすることなく年を経たのも、生きてこの世にあればま恋」題で詠まれた歌で、「年経ぬる」「あらば逢ふよ」とあり、本自歌合とは異なる配列である。さてこの六十番は左が「久

た逢えることもあろうという心強さのためですよ、というも

「逢ふことは忍ぶ」と置く。ここでは左の歌と番わされこと「恋」題の歌で、左歌四句目の「あらば逢ふよ」から初句を久しく続く様を詠む。一方、右歌は建保四年「内裏歌合」ののである。前番右の「遇不逢恋」の状況を承け、その状態が

これに続く六一番で、左の歌が差し替えられているが、二、人目を忍ぶまれの逢瀬ということになろう。

忘れずは慣れし袖もや氷るらん寝ぬ夜の床の霜の小莚ず、いかにせん浦の初島はつかなるうつつの後は夢をだにみいかにせん浦の初島はつかなるうつつの後は夢をだにみ

シーミコン、ついつ引つを預つ後は民られげ、夢で広へにをである。左の切り出し歌は、「浦の初島」から「はつかなる」である。左の切り出し歌は、「浦の初島」から「はつかなる」

いで眠ることができないと嘆くのである。右は「六百番歌け、それがつかの間の逢瀬でしかなく、また逢いたいとの思うこともできなくなったと嘆く。前歌の「まれの逢瀬」を承を引き出し、つかの間の逢瀬の後は眠られず、夢で恋人に逢である。左の切り出し歌に「清の初島」から「はてかたる」である。左の切り出し歌に「清の初島」から「はてかたる」

であって、恋人が自分を忘れずにいたら恋人の袖も今頃涙で心、優に侍るべし」とするように、「忘れず」の主語は恋人が「寝ぬ夜の床の霜の小莚といへる、人の袖をも思ひやれる合」「寄蓆恋」題で詠まれ、勝となった歌である。俊成判詞

として連続し、「内大臣家百首」の歌同士での結番、つまり歌二首を合わせる。「内大臣家百首」の歌はほとんどが歌群女の歌である。この結番は恋人を思い、眠れぬ夜を過す女の凍っているだろうと、恋人を思いやり一人「寝ぬ夜」を過す

今のまの我が身にかぎる鳥の音を誰うきものと帰りそめ三次本で、新たに左に切り入れられた歌は、

と合わされた一番で、名所歌群中のものではない。

名所詠の番となっているが、六一番は二次本で唯一非名所詠

という「後朝恋」題で詠まれた歌である。後朝の別れを告げけん

- 38 -

とする、歌題に相応しい歌といえよう。また、前番六十番右る「鳥の音」を、その辛さ故に「いまのまの我が身に限る」

「逢ふことは」に照応した「後朝」と考えられる。二次本

(で) これ、「計画)というでは左の後朝の別れの朝から、右の「寝ぬに較べ、三次本では左の後朝の別れの朝から、右の「寝ぬが「眠れぬ夜」という同じ状況の二首並列の結番であったの

える。しかし、恋の進行に従うという恋部の構成に変化はな左右に時間の経過が生じたことから、物語的になったともい夜」という時間の流れができ、立体的構成の一番となった。

ともなった。

恋部最後の差し替えは七六番右である。これも七五番から

〒「黒つ前へ)こっご)/引亙)ねれて)後で頼って)にしているうな左右二首の差し替えではない。二次本七六番は、七七番までの「内大臣家百首」の歌群中にあるが、五八番の

┛ 命だにあらばあふ瀬を松浦川かへらぬ浪もよどめとぞ思⊄ 袖の浦かりにやどりし月草のぬれての後を猶やたのまん

、 ……、 「型)、 だが、三次本では右歌を切り出し、「関白太政大臣百首」 「遇

し替えられた番だけでは、差し替えの意図が見え難いので、により名所を含まない番になったが、ここは少し異なる。差を切り入れている。これまでみた二番は、いずれも差し替えーはるかなる人の心の唐土はさわぐみなとに言づてもなし不逢恋」題の、

ここでも前後の番をみていく。前番七五番は

右 形見こそあだの大野の萩の露移ろふ色はいふかひもなしる たのめおきし後背の山のひとことや恋を祈りの命なりけ

である。左に「たのめおきし」「後背(後の逢瀬)

の山のひと

右歌の「形見」は、左の歌と番わされることにより、恋人の恋人のことでもあり、恋人の一言を頼みにしている歌である。共に地名を掛詞にして巧みに詠まれているぽ。左の「背」はこと」、右に「あだの大野」「いふかひもなし」とある。左右

続く七六番左「袖の浦」歌は、前歌の「いふかひもなし」はなく、恋歌に相応しい意味を持つのである。地名そのものが掛詞になり意味を持つ。ただ意味を持つので左に「ひとこと」右に「いふ」が詠み込まれ、同時に両首共

ら恋人の心変わりを言っても甲斐もないとなる。この一番は、言葉と解釈でき、その言葉が「徒(あだ)」となった、今さ

い心の(「いふかひもな」い)恋人を「猶やたのまん」とする。を承け、仮の宿りの逢瀬の後、「月草」のように移ろいやす

の掛詞は恋歌では常套的で、六二番右の「来ぬ人を松帆の浦を持つ地名として配列されたのであろうが、「松」と「待つ」でり、諦めたり、また思い直して望みを掛けたりと揺れ動くたり、諦めたり、また思い直して望みを掛けたりと揺れ動くたり、諦めたり、また思い直して望みを掛けたりと揺れ動くたりの。は、恋人の訪れが遠のいた後も相手の言葉を信じし近のでしょができた。とうる、などのは、恋人のおれて

続けて行き、決して戻ることのない川浪を恋人に譬え、「帰 もいる。一首の眼目は、寄せては返す海の浪ではなく、流れ の夕なぎにやくやもしほの身もこがれつつ」ですでに用いて

の「袖の浦」から縁語によって続く趣向の結番と思われるが、

らぬ浪もよどめ」と「思ふ」ことであろう。この「浪」が左

て」もないとなり、左の「猶やたのまん」を挟み、七五番か 三次本では「唐土」のように「はるかなる人の心」は「言づ

らの恋人の「言葉」をキーワードにした配列が続くことにな

る。次の七七番左は、 忘貝それも思ひのたねたえて人をみぬめの浦みてぞぬる

だが、この歌の「思ひのたね」は三次本では、切り入れ歌の 「言づてもなし」を承けて恋人の「言葉」と解釈できる。

られる。差し替えにより、「言葉」をキーワードとする物語 的配列構成がより一層明確になったといえよう。同時に「松 という詞が重視され「はるかなる」に差し替えられたと考え 五番から続いた「言葉」が、ここではそれも絶えてしまい、 「みぬめ」を「うら(浦)」むこととなる。つまり三次本では、 一次本の「待つ」と掛けた地名「松浦川」より、「言づて」

比喩ではある。 以上三、四で「恋」の差し替え四首をみてきたが、恋の進

いうのではなく、恋人の「心」が遠く離れてしまったことの クセントができた。もちろんここでの「唐土」は中国を直接 浦川」が異国の地「唐土」となることで、名所詠の歌群にア

> えよう。 所が、前後の番との繋がりを重視したものに改訂されたとい 行に即した構成配列に変化はなく、名所が重視されていた箇

五、「恋」における「内大臣家百首」の名所詠

切り入れ歌全てが非名所詠であることから、選択の基準に たと思われる。しかし、恋部では切り出し歌全てが名所詠、 てきた結番、構成配列など、様々な要素で取捨選択がなされ ところで改訂に際しては、 歌そのものの吟味やこれまでみ

所を次に掲げる。上段が第一の歌群、下段が第二の歌群で、 ついて触れたい。二次本に採歌された「内大臣家百首」の名 に恋部の差し替えで重要な要素となったと考えられる名所に 「名所」そのものが深く関わったと推測される。そこで最後

□で囲ったものが三次改訂で切り出された名所である。

(第二の歌群)

七五番左「後背の山」

五六番左「吹上の浜 右「住の江」

五七番左「室の八嶋」

(第一の歌群)

五八番左「甲斐が嶺」 右「蘆の屋」

五九番左「床の浦_ 右「緒絶の橋」 竜田山」

七六番左「袖の浦_ 七七番左「みぬめの浦. 右「真間の継橋 右「松浦川」 右「あだの大野」

八十番右「とば山」

- 40

この歌の本歌取である。同様に「室の八嶋」も、「いかでか「夜」を引き出し、恋歌に多く詠まれる名所で、定家の歌も(古今・恋二・五五九・敏行)によ り、「浪」が「寄る」と「住の江の岸による浪よるさへや夢の通ひ路ひとめよくらん」首』にも採られた、

や「緒絶の橋」は、「建保名所百首」でも恋歌の歌題となっ

ているが、そのような名所以外でも「住の江」は

置人一

な傾向は恋の終わりを詠む後半の歌群に特に多い。「袖の浦.

びつきやすい名所である。く「火」を詠み込んでいるが、いずれにしても恋の思いと結な、下火」を詠み込んでいるが、いずれにしても恋の思いと結恋歌に詠まれることの多い名所である。定家は「煙」とともに恋上・一八八・実方)でよく知られるように、「煙」とともには思ひありとや知らすべき室の八嶋の煙ならでは」(詞花・は思ひありとや知らすべき室の八嶋の煙ならでは」(詞花・

恋歌とは結びつき難い。言い換えれば、二次本の段階では恋かす名で、恋歌と直接結びつく名所ではない。また「竜田もみしがけけれなく横ほりふせるさやの中山」(一○九七)のやらむ」より、同じく『古今集』東歌の「甲斐が嶺をさやにた「甲斐が嶺をねこし山こし吹く風を人にもがもやことづて用いられていない。「甲斐が嶺」は、定家の歌の本歌となっ用山」はいずれも初句に置かれ、一首の中で掛詞として「竜田山」はいずれも初句に置かれ、一首の中で掛詞としての歌とは結びつき難い。言い換えれば、二次本の段階では恋恋歌とは結びつき難い。言い換えれば、二次本の段階では恋恋歌とは結びつき難い。言い換えれば、二次本の段階では恋恋歌とは結びつき難い。言い換えれば、二次本の段階では恋いする。

成配列上の理由が大きいと考えられるが、やはり「床の浦」「松浦川」の切り出しについては、先述したような結番や構た建保期だからこそ生じた面白さであろう。「浦の初島」や

や「緒絶の橋」ほど、恋歌に直截に結びつかない。

歌にあまり詠まれない名所であることに面白さがあり採歌さ

れていたと考えられるが、それは名所詠が数多く詠まれてい

集』摂取との観点からも考えていかなければならないが、こいうべきものがあり、詳細な考察が必要で、建保期の『万葉名所については、ひとつひとつに、それぞれの詠歌史とも

いたのであろう。 次本改訂時にはすでに目新しさのないものになってしまってとを指摘しておきたい。さらにいえば名所詠そのものが、三れる名所であることが、定家の選択の基準の一つであったここでは恋歌に相応しい名前を持つことや、恋歌に数多く詠ま

紀れ

あり、 あっても、 物の歌群とは異なり、「恋」の名所詠歌群は二次的な趣向で 名所詠歌群が分断されたが、「桜」や「月」という四季の景 構成の変化はみられなかった。恋部では「内大臣家百首」の し替えられ、 すべて歌群内部の改訂であって、例えば月の歌が月の歌に差 家百首」の歌であった。「四季」では「桜」「月」「紅葉」と、 いずれも新たに切り入れられたのは、貞永元年「関白左大臣 変えることはなく、あくまでそれぞれの歌群内部の構成配列 とから、「四季」と「恋」の三次改訂は、二次本での構成を など細部変化にとどまり、その完成度を高めたものといえる。 「四季」と「恋」に関する限り、新たに詠出された秀歌で .季部と恋部における三次改訂の改訂箇所をみてきたが、 恋の進行に沿った配列構成に変化はなかった。このこ 結番や構成配列上、本自歌合に切り入れが困難な 四季の景物の置かれる順序が変わるなど、配列

また、多くの名所詠が非名所詠に差し替えられた。名所が歌は、撰入されなかった可能性が考えられよう。

所にあったことは疑えないだろう。

がい。もちろん、構成の中でより相応しい新たな歌があってといる所を含む歌が、定家の目に付いたとしても不思議はたない名所を含む歌が、定家の目に付いたとしても不思議はたない名所を含む歌が、定家の目に付いたとしても不思議はたない名所を含む歌が、定家の目に付いたとしても不思議はたない名所を含む歌が、定家の目に付いたとしても不思議はたない名所をあれる。そのような歌壇の状況の中で編まれた本と下時期であった。そのような歌壇の状況の中で編まれた本と所述を通して切り出し歌をみると、概ね結番や配列のなかで、比較を通して切り出し歌をみると、概ね結番や配列のなかで、上較を通して切り出し歌をみると、概ね結番や配列のなかで、といいので、当時に関して切り出し歌をみると、概ね結番や配列のなかで、といいのでは、当時に関いている。

(1)成立に関しては樋口芳麻呂氏が「定家卿百番自歌合成立攷」注

(『国語と国文学』三十―六号 一九五三年六月)で、その過程を

の考察」(『国語国文学報』四号 一九五五年三月)、「自歌合の季(2)注1論文。同氏には、他に「建保五年本定家卿百番自歌合とそ

節」(『愛知淑徳大学論集』二一号

一九九六年三月)がある。

明らかにされた。

料とするためとされる。 稿』八号一九八三年十一月)で三次改訂を『新勅撰集』の撰歌資(3)部矢祥子氏は「『定家卿百番自歌合』について」(『中世文芸論

一九八二)②『『定家卿百番自歌合』雑部の構成をめぐって」(4)①『『定家卿百番自歌合』の結番方法」(『国文学論集』十六号

- 号 一九八四)。 百番自歌合』の成立と改稿―その一成立―」『国文学論集』十八百番自歌合』の成立と改稿―その一成立―」『国文学論集』十七号 一九八四年一月)③「『定家卿
- 「雑」四首の考察をしたい。 含む考察が必要であり、問題が大きいと考えられるので、続稿で(5)「雑」四首中三首は賀歌の改訂で、承久の乱後の政治的状況を
- (6)注(1)論文。
- している。このことは、本自歌合を単なる秀歌撰として安易に扱撰集』に入集させ、『詠歌一体』では「昨日はうすき」を制詞と(7)為家は、切り出された「小倉山」の歌を評価しており、『続後

うことへの注意を促すものであろう。

- (8)拙稿「定家の百首歌における「有明」─四季歌を中心に─」(8)拙稿「定家の百首歌にている。なお、この二首は「花月百首」の月五十首で月齢にこだわった配列を行っていることを指百首」の月五十五号 二○○四年四月)において、定家が「花月(8)拙稿「定家の百首歌における「有明」─四季歌を中心に─」
- (9)宇治の「橋姫」については『奥義抄』『袖中抄』などの歌学書の月五十首中でも並べて置かれている。 る配列をそのまま利用している。なお、この二首は「花月百首」

に記述がある。

中に「宇治の橋姫」を置いたと考えるものである。なお、この趣る八番左の「袖ふる」「乙女子」と対応させ、「秋」の「月」歌群参考にしたと推測される。本自歌合で「春」の「桜」歌群中にあ春の「佐保姫」と秋の「立田姫」が対応して置かれていることを春の「佐保姫」と秋の「立田姫」が対応して置かれていることを春の「佐保姫」と秋の「立田姫」が対応して置かれていることををがという疑問がわく。これについて私見を述べると、定家は、本かという疑問がわく。これについて私見を述べると、定家は、本かという疑問がおく、

番右に「袖ふる」「乙女子」を置く。と「秋」を逆転させ、「春」四番右に「宇治の橋姫」、「秋」二四

向は家隆にも継承されたようで、『家隆卿百番自歌合』では

- (1)注(1)論文、辻森秀英氏「定家の百番自歌合の撰歌態度について」(『国文学研究』一九五八年三月)。
- (3)唐沢正実氏が「建保期の名所歌合二種及び「難題和歌」につい、比較を中心に─」(『百舌鳥国文』第一六号、二○○五年三月)。(⑵)「『定家八代抄』と勅撰集恋部の四季配列─『新古今集』との
- 摘されている。 年一二月)で、建保期の名所詠に「掛詞の使用が多いこと」を指て一順徳天皇の和歌活動管見―」(『古典論叢』第一九号昭和六二
- 切り入れられなかった可能性が指摘できる。歌である。日にちが特定される行事の歌であるため撰入が困難で次本に切り入れられていない歌が一首あるが、それは「葵祭」の(14)二次本成立後の詠出で、『新勅撰集』に入集していながら、三
- 摘がある。 『定家卿百番自歌合』(一九九一年 角川書店)一五五頁脚注に指(15)新日本古典文学大系『中世和歌集 鎌倉篇』川平ひとし校注

上及び終了後に御教示頂いた先生方に心より御礼申し上げます。大阪女子大学)における口頭発表に加筆修正したものである。席〈付記〉本稿は平成十四年度和歌文学会関西例会(七月二七日)於

【使用テキスト】

松平文庫蔵本(新典社 一九九四年) 一次本…松平文庫影印叢書第四巻『定家卿百番自歌合』島原図書館

合した。 三次本…宮内庁書陵部蔵『百番歌合』を用い、一部他本によって校

※引用に際し、適宜漢字表記に改め、濁点を私に付した。

(ほそかわ・ちさこ 本学大学院博士後期課程)